出土漆製品の科学的研究

武田昭子

「漆」は縄文時代から近代まで、日本の文化に深く関与している天然樹脂である。塗装材として器面を彩り、また塑形材や接着剤として幅広く使用されてきた。漆工品の蒔絵や螺鈿で彩られた品々は、日本文化の美の粋を物語るものとして、中世から近世にかけて輸出品の代表的な品物の一つともなっていた。

近年、低地の発掘調査が盛んになり、このような伝世品に加え多くの漆製品が出土し、各時代の漆文化を塗り替えつつある。樹脂としての漆の化学的な研究は、1870年代頃からなされ、その成分や構造式が明らかにされた。伝世品である漆製品の研究は、修理を機会になされ、技法的な調査が行われてきた。発掘された漆製品は埋蔵文化財特有の劣化が見られ、伝世品とはまったく異なる保存方法の検討が迫られた。このようなこともきっかけとなり、近年漆製品の研究が各所で、様々な方法で行われるようになった。本学では、諸種の事情から、光学機器を用いた断面観察法を主に実施している。縄文時代から江戸時代まで、器物資料を中心に漆製品塗膜のプレパラートを作成し、その技法的解明を時代の変遷とともに捉える試みをおこなっている。

醤油販売容器製造の変革

小川浩

我が国の醸造業を支えた桶・樽の役割は終焉したが、樽は近世から昭和三〇年代までの約三〇〇年間、醸造製品を流通させ、醸造業全体の隆盛に寄与した点を再評価したい。本報告では、関東の醤油樽製造の変革に着目し、製造終焉までを概観したものである。

1．桶と樽の定義―桶と樽の相違点―

2．近世から明治の醤油樽

（1）下り物醤油樽と酒樽の再利用―明（空）樽問屋の容器支配―

（2）酒樽の醤油樽改造（潰し樽）　（3）秋田杉材（樽丸）の使用―新木新樽の拡大―

3．容器の変革

（1）日露戦争後の需要拡大　（2）容器不足と容量統一

（3）製樽技術の機械化　（4）樽から壜への変革の兆し

上記の内容で桶と樽の相違点を明確にした上で、近世から明治期の古酒樽利用というリサイクルの仕組を確認した。このことは関西の製樽技術が関東へ移転したことである。この技術が大正期以降機械化され、座業による手工業が立業の機械生産（半機械生産の段階）へと変化し、戦後に関西へ移転されている。歴史文化の伝播が西から東へという図式であるが、製樽技術文化は西へ再伝播されている点を重視し、産業技術史を見直す必要があろう。